

変換効率 正しく計測

太陽電池セル
評価用治具
山下電装が独自構造



【立川】山下電装（東京都八王子市、山下昌彦社長、042・650・7121）は、太陽電池セル評価用治具「スリムプローブステージII写真」を完成した。プローブ（探針）がセル上のバ

スパー電極に直接接触する独自構造により、光を遮っていた探針バーがなくなり、セル本来の変換効率を正しく計測できる。バスバー電極が3本付いた6形結晶シリコンセルで測定したところ、

同社従来品比で変換効率が7・31%向上した。価格は水冷用チャラーなしが150万円から。自社の太陽光シミュレーターとセットで販売するほか、他社製品の代替を狙う。太陽電池メーカーや研究開発機関に提案し、年20台の販売を目指す。セルのバスバー電極は従来の2―3本から4―5本に増えつつあり、幅も2ミリから1ミリ以下

に狭まっている。そこで同社は電流と電圧を取り出す探針の形状を1ミリ幅のバスバー電極に収めることで、受光面に影が出るのを抑え、測定値の低下防止を実現した。

探針は電流測定用の長い針、電圧測定用の短い針で構成している。